

## 過小規模（複式学級）のメリット・デメリット

## 複式学級とは

小学校の場合、二つ以上の学年を合わせても16人以下（1年生を含む場合は、8人以下）となる場合に編制した学級をいう。

通常は、異なる学年の児童が一つの教室で一人の先生から同時に授業を受けるため、一方の学年が指導を受けている間、もう一方の学年は自習課題等をするようになる。

今治市では、市費で学習アシスタントを配置し、一つの学年に対して一人の教員が授業を行うようにしているが、担任が二つの学年全ての授業を行うことができないので、「児童の学習理解度が分かりづらい」「授業中の様子を把握できない」といった不都合も出ている状況である。

	メリット	デメリット
学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>●児童の一人一人に目が届きやすく、きめ細やかな指導が行いやすい。</li> <li>（人数が少なく、マンツーマン指導が可能）</li> <li>●施設、用具を十分に使うことができる。</li> <li>●上級生の勉強を知ることができる。</li> <li>●上級生は下級生へアドバイス等を行うことで自己有用感を感じる機会が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●一人一人の児童に大人の目が行き届きすぎることにより、子どもが甘えやすくなったり、疲れてしまったりする。</li> <li>●多様な意見が出にくい。</li> <li>●出来ない授業が生じる（体育種目、グループディスカッション）。</li> </ul>
行事	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学校行事では、一人一人の個別の活動機会が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●運動会や文化祭などの集団的な学校行事で、種目等の制約が生じる。</li> </ul>
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>●相互の人間関係が深まりやすい。</li> <li>●異学年間の縦の交流が生まれやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●人間関係や相互の評価等が固定化される。</li> <li>●切磋琢磨する機会が少ない。</li> <li>●高学年の複式学級では、下の学年が少し窮屈に感じる一方で、年上の学年への甘えも生じやすい。</li> </ul>
保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>●保護者間の連携が図られやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●PTA活動における保護者一人当たりの負担が大きくなりやすい。</li> </ul>

※市内小学校教職員からの聞き取りを基に今治市教育委員会事務局が作成

## 小規模校のメリット・デメリット

### (1) 教育（学習）上の視点（子どもたちについて）

	メリット	デメリット
学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>●児童生徒の一人一人に目が届きやすく、児童生徒の個性や能力に応じたきめ細やかな指導が受けられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●少人数の為、学習面においても評価が固定化されやすく1学年1学級の場合、ともに努力してより良い集団を目指す、学級間の相互啓発がなされにくい。</li> <li>●運動会や学芸発表会などの学校行事においては、少人数のため種目や演目に限界があり、行事としてのダイナミックさに欠ける。</li> <li>●少人数のため、友人の様々な考え方に触れ、自他を比較し、自分の考えを見つめなおし、考えを深めたり高めたりする、個と集団の学びあいが十分に行なわれない。</li> <li>●1学年1学級の場合などは、卒業するまで同一学級で過ごすため、子どもの役割が固定しがちで、学習活動など、学校生活に活気が生まれにくい場合がある。</li> </ul>
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>●児童生徒・教員・保護者を含めて互いの結びつきが深くなり家庭的な人間関係を形成しやすい。</li> <li>●他学年との交流ができやすいため、互いを思いやる気持ちが育つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●児童生徒の交流が限られたものになるため、交友関係が固定され、適度な刺激や切磋琢磨が少ない。</li> <li>●小規模化が進むと、効果的なクラス替ができない為、生活面において人間関係が固定化し、友人が増えないなど自己形成に必要な集団生活が十分にできない。</li> <li>●友人関係にトラブルがおきると後々まで影響が残る。</li> <li>●少人数の教員とのかかわりに限られるため、多様な価値観が育ちにくい。</li> </ul>
施設・教材	<ul style="list-style-type: none"> <li>●少人数のため、教材・教具の一人あたりの割り当てが多い。</li> <li>●体育館、特別教室等を必要に応じて十分利用することができる。</li> <li>●施設・設備の利用時間等の調整が行いやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●デメリットについて、特に意見はなかった。</li> </ul>
部活動 クラブ活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>●クラブ活動、部活動等において、児童・生徒一人一人の個別の活動機会や活躍の場が得られやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●少人数のため、子ども達の興味、関心に対応できる多様なクラブ活動、部活動が成立しない。</li> </ul>

※前回（H21年度）「今治市通学区域調整審議会での答申参考資料」を基に今治市教育委員会事務局にて作成

## 小規模校のメリット・デメリット

### (2) 学校運営上の視点（教員にとって）

	メリット	デメリット
学習指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>●個々の児童・生徒の個性や特性に対応したきめ細かい指導をすることができる。</li> <li>●教材・教具を十分活用した学習方法を工夫することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●教員数が少ないため、教員同士が指導の面で相談を行なうことや教科研究を十分に行なうことができない。中学校では、教科担任を専属で配置できない教科が発生するなど教育活動での課題が生じる。</li> <li>●複数の教員の目で多様に子どもをとらえることができないため、特性等の把握が一面的になりやすく、児童生徒の新しい可能性や能力の発揮を阻害する場合がある。</li> <li>●児童生徒の様々な現われを多面的に分析した生徒指導ができにくく、画一的な指導になってしまう。</li> </ul>
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>●意思疎通がしやすく、全校一体となった指導がしやすい。</li> <li>●学校全体の業務を考えての指導協力体制がとりやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●校務分掌（事務処理）の内容や量は、学校の規模による差異が少ないため、少数教員の一人当たりの負担が増える。</li> <li>●組織的な体制が組みにくく、指導方法に制約が生じやすい。</li> <li>●教科担任制においては、担当教員が多学年の授業を受け持つことになり、教材研究等が困難になりがちである。</li> </ul>
危機管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>●災害発生時に、混雑が生じにくく、子どもの把握がしやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●小学校などでは、教員数が少ないため、登下校時の安全指導等に支障が生じる場合がある。</li> </ul>

※前回（H21年度）「今治市通学区域調整審議会での答申参考資料」を基に今治市教育委員会事務局にて作成

### ※（参考）

#### 教職員数の配置基準

学 級 数			教職員定数 (教頭含む) (名)	校長・養護教諭 事務職員・栄養職員	計 (名)
通常学級	特別支援学級	計			
6	0	6	7	4	11
6	1	7	8	4	12
6	2	8	10	4	14
6	3	9	11	4	15

市職員として学習アシスタント1名/校あたり配置（予定）

令和7年度現在の教職員数

鴨部小 通5+特支1=6学級 11.5名（10.5+1※）※：学習アシスタント

九和小 通6+特支3=9学級 16.0名（15.0+1※）